

桑田正博先生の思い出

永田和弘 令和 1. 5. 2.

1. 桑田先生との出会い

私が始めて桑田先生にお目にかかったのは1978年の初冬のことでした。三重県松阪市で開業したばかりの頃です。歯科技工士串上達也先生の紹介で、二人で三重県から出かけていきました。桑田先生は噂には聞いていましたが、顔も知らないしどのような雰囲気の方なのか知りませんでした。ただ、歯科技工士でありながら桑田カレッジを設立し、日本の歯科技工士の世界を革新したいという心意気には強い関心を持っていたのです。

桑田カレッジは三田駅から北へ10分くらいの所にありました。桑田カレッジの名前からどのような大学なのか興味もありました。「ここです」と指差された建物は普通の建物で小さな町工場の雰囲気がありました。イメージとは正直、随分と異なったので少し驚ろいた。1階は技工作業場で多くの若い技工士達が机に向かっていました。2階の小さな部屋に通されて少し待った。「桑田先生とはどのような方なのだろうか」と思っているうちに桑田先生が出てこられた。「桑田です」と自己紹介される顔は満面の笑みで、緊張する私の心を一瞬にして和ませてくれました。小柄な体格で非常に穏やかで、とても世界に羽ばたく強烈な個性を持った人には見えませんでした。私も、こうして歯科医師ではあるがもともとは歯科技工士を目指していたことを打ち明けると、桑田先生のお話はさらに熱を帯びるものになっていった。あたりをきょろきょろ見回す私を見て「建物が質素で驚かれたでしょう」と私の心中を見抜かれてドキッとすると同時に次の言葉に感服した。「アメリカに長居をしているよりも、早く日本に帰って人材を育てたい。そのためには研修機関が必要だったが、予算には限りがあった。都心で、交通の便がよく、安い土地物件を探して、見栄えよりも実質的な建物が欲しかった。」話を伺っているうちに胸に秘めた志(こころざし)は並ではなく、このまま興味本位の訪問では済まされない気持ちになってきた。「どうせ、歯科技工士になるのであるならば、いっそのこと歯科医師になって、我々歯科技工士の世界を良くしてくれないか」私の高校3年生のときの歯科技工士の方の言葉と重なった。歯科技工の世界に一条の光を投げ込むつもりで歯科医師にはなりませんが、歯科技工の世界に何の貢献もしていない自分がいる。目の前の桑田先生は私の数倍もの試練の中でこうして歯科技工の世界の構築に励んでおられる。私も及ばずながら何かしなくてはと思った。まもなく始まる桑田カレッジの3ヶ月のシニアコースの受講を予約して、おいとますることになった。これが私が受講した数ある卒後教育コースの最初であった。私は桑田先生から出発したのです。

2. 桑田先生を支えたもの。 信念・人々

もう40年以上も昔のことで、コースの思い出はほとんどない。むしろコースそのものよりも、受講していたときに受けた感激が今も昨日のように思い出されて、今日の私を励ましてくれる。研修とはそのようなものではなからうか。

桑田カレッジの2階が研修場で30人くらいが勉強できた。柱には「何故への追求」と書かれた額が架かっていた。「理論と実践」もあったように思う。考えて見れば、これらの額がコースの真髄を現していた。学ぶよりも「何故」が優先し、実践できない理論は意味がないことを教えていただいた。この研修施設には海外からも多くの受講生が参加していた。中にはアメリカの著名なリーダーとその息子さんも居られたという。日本では歯科技工士が大学の教授に講義する姿は想像だにできないが、アメリカの教授クラスの方々がこの質素な研修施設に足を運んでいるのだ。桑田先生は面白いエピソードを話してくれた。アメリカの著名な教授とその息子が桑田先生の実技指導を受けていたときのことである。その息子はよく質問をした。質問はその質問自体が理解の程度を表しており、ときとして質問自体が講義の流れをさえぎり、質問者・受講者の理解に支障をきたす場合がある。聞かねばならないときに限って拝聴しないで質問をする息子に、親の前ではあるが「シャラップ」と一喝を入れた。息子はシュ

ンとなり、おとなしく聞くようになった。後で親御さんから「よく叱ってくれた」と御礼の言葉があったという。学問の前では資格の上下・段差はないという桑田先生の信念が現れた場面であった。

桑田カレッジの1階の左奥には小さな小部屋があり、白髪の老人が一生懸命にタイプライターに向かっていた。最初は何だろうと思っていたが、聞けば桑田先生のお父様で、息子桑田先生のために英語の主要な文献を翻訳・タイプしているとのことだった。英語はすでに母国語のように話せる桑田先生なのに「どうしてまた」と疑問が浮かんだ。桑田先生は「私は日本人です。英語は読めるが、日本語のように読めない。翻訳してもらって日本語で読めることは大変に助かります」とおっしゃった。世界の桑田先生も、家族を含めて総員で支えられていたのだと思った一瞬でした。

3. 二人の恩師 桑田先生と保母先生

私はいつしか桑田先生最真(ひいき)になっていました。当時日本を席卷していた2大潮流、すなわち、米国の西海岸を代表するナソロジーとアメリカの従来 of 歯科学を牽引する東海岸の生理学派の内、桑田先生は東海岸に学んでおられました。私は1969年に大阪大学歯学部を卒業していますが、ちょうどその頃、アメリカからナソロジーの学術が入ってきたのです。切削器具も電気エンジンからタービンへ、印象材はアルジネートからラバーまたは寒天印象へ、嚙面鑄造冠からフルキャスト冠へ、前装冠からメタルボンドへ。咬合器も Gysi Simplex から Hanau やデンタータスへ。まさに日本の歯科医学の大転換の時期でした。多くの学術的歯科医師達がアメリカに研修旅行に出かけました。また、多くの海外の論客が来日しました。なかでも、ナソロジーのインパクトは強く、ヨーロッパの論客も含めてナソロジーが多少入り込んでいたのか、それとも、受け取る日本人のほうで全ての学術にナソロジーを付与して聞き入れたのか、とにかく日本中がナソロジーに漬かった状態でした。ナソロジー旋風がすさまじい中、日本の歯科医師達は学術は学術として、日常の臨床にはナソロジーとは一線を引いていたように思います。そのような中、学術の先端を行く学術的歯科医師達は最先端の器材を駆使して、それらを使いこなせることがステータスのような気持ちでナソロジーに向かっていました。シンプルブリッジの症例でも顎位を最後退位に持ち込むためには、フルブリッジにする必要があるのか？ 正直それは可笑しい話だと思いました。ナソロジーは明らかに現実の臨床に持ち込めるものではありませんでした。桑田先生の立場は東海岸の生理学派でしたが、ナソロジーではない意見は日本ではマイナーな存在となってしまうために、幾分かはナソロジーを取り込んだ部分があったように思います。日本には戦前のアメリカの学術はまったく入っていませんでしたから、ナソロジーがアメリカにおいて1950年代に急激に普及し出した直後であったことも、東海岸が歴史あるアメリカの伝統的潮流であることも知りませんでした。同時的に二つの潮流が入ってきて、しかもナソロジーの占める割合がはるかに大きいことを考えると、東海岸の理論が小さく見えたことは仕方がなかったことかもしれません。(戦争以前の情報がまったく無かったために、例えば、ナソロジーにしても始祖 McCollum には最後退位の概念そのものが全く無かったことなど知る余地もありませんでした。本当に、日本に入ってきたのは、終戦直後のアメリカの歯科状況だけだったのです。東京医科歯科大学の藍稔元教授は半世紀にわたり、ナソロジーの変質を誰も指摘しなかったのは不可思議だと言ってます(2019)。この詳細は後述します。)

頭で「ナソロジーはおかしい」と思っている、現実に咬合器の操作をはじめ、フルキャストクラウンの精密な適合法に至るまで、ナソロジー抜きには研修は不可能でした。ナソロジーはおかしいと思うが、正しくナソロジーを学ぶにはナソロジーの研修コースを受けるしかありません。私が保母須弥也先生の国際デンタルアカデミーの1年コースを受講したのは1980年のことでした。桑田先生に真を置きながら、保母先生に教わるのは居心地が悪いものがありました。しかし、この体験は日本がどのようにしてナソロジーに飲み込まれていくかを見るにまたとない視点を与えてくれたのでした。

4. 日本の表舞台と裏舞台

保母先生は日本大学歯学部を1961年に卒業されてすぐにアメリカインディアナ大学大学院に進まれます。アメリカでは昼夜を惜しまず参照した文献は3,000におよび、開発されたばかりのメタルボンドに注目して帰国後直ちに『金属焼付けポーセレン』(1965)を出版します。それらの成果は『オーラル・リハビリテーション』(1968)出版に結実します。総ページ数867を数え、引用文献辞典としての役割も果たす大著『オーラル・リハビリテーション』には東京医科歯科大学の寿朗教授が推薦の言葉を寄せています。「保母氏の著書『オーラル・リハビリテーション』は、その内容が理論的に深く、広範にわたるとともに、臨床上の実際面に役立つようによく整理されている点に心から敬服いたしました。……」

20歳も年下の若輩保母先生への敬意を表しましたが、当時すでに「咬合のメッカ・東京医科歯科大学」「咬合の石原」が定着していたことを考えると、『オーラル・リハビリテーション』は大変なお墨付きを得たこととなります。当時はこの推薦の辞も違和感はありませんでした。しかし、今読み直してみると“心から敬服”には違和感を覚えます。『オーラル・リハビリテーション』には石原先生が参照できなかった引用文献が多く並んでいます。アメリカの最新情報であるキャストクラウンやメタルボンドなどは、日本の最先端の東京医科歯科大学とはいえ試行錯誤の状態でした。“心から敬服”はその通りであったと思います。しかし、石原は先の推薦の辞の中で慎重さの言葉を忘れませんでした。「多くの方が意欲的に注意深くこの方面への努力をつくされるように願っています」

そこには石原の教室の成果である顎頭安定位の発見(大石1967)と全運動軸の発見(河野1968)を得たことにより、今は全盛を誇るGnathologyも近い将来には根底から批判されることを確信していたからに他ならない。残念ながら、翌1969年に石原は大学紛争の中で自死し、今日のGnathology批判を見ることはなかった。

日本における表舞台で保母先生が脚光を浴びていた頃、桑田先生は日本では目立つことなく、アメリカで大活躍をしておられました。セラモメタルクラウンの世界の第一人者として1964年にはアメリカ各地で、1965年にはヨーロッパ各地で講演に奔走しておられました。中でも、1965年2月のシカゴのミッドウインターミーティング100年祭で、セラモメタルテクノロジーの実技のクローズアップテレビ中継は驚きを伴う注目を集めていました。この聴衆の中に保母先生の姿がありました。コンデンスの重要性を目の当たりにしたはずです。保母先生が世界で最初のメタルボンドの著書『金属焼付けポーセレン』(1965)を出版するのはこの4ヵ月後のことです。(桑田先生の出版は保母先生に比して随分と後のこととなります。『金属焼付けポーセレンの理論と実際—クラウン・ブリッジ製作のために』(1977年)、『セラモメタルテクノロジー』1(1982)、2(1983)。)

また、桑田先生のコースで記憶に残るデモがあります。それはポーセレンを金属片に焼き付けて、その金属片を撓(たわ)ませるのです。焼成されたポーセレンは金属片と共に曲がり、その表面は曲げ方向と直角に無数のヒビが入りますが、剥がれないのです。溶着強度が強いことを示しています。金属・ポーセレンの開発など大変な苦勞があったと聞いています。(興味ある報告があります。山本真先生がコンデンスそのものの重要性は低い結果を示しておられます。(『ザ・メタルセラミックス』(1982))もとより、コンデンス周囲の条件は無数にあり、そのまま初心者がコンデンスを無視しても結果は同じというわけには行かないでしょう)

5. 日本へのアメリカ歯学の導入

戦後の新しい歯科学の導入には保母須弥也先生と桑田正博先生が果たした役割はきわめて大きいものがあります。保母先生からは臨床が、桑田先生からは歯科技工が日本にもたらされました。しかし、お二人の日本における立場は微妙に異なるところがいくつかありました。一つは歯科医師と歯科技工士という立場です。もう一つは保母先生が整理上手な説得力を武器とすれば、桑田先生の武器は謙虚な慎重さでした。アメリカにおいても咬合論は混沌としていましたが、保母先生は見事に整理して現代咬合論を日本に紹介したのでした。

例えば、こうです。

「Hanau, Gysi までは義歯の咬合論であって、そこでは曖昧さが許されていた。しかし、有歯顎では厳密な咬合論が要求される。そこで、種々の咬合論が生まれてきた。

フルバランスド・オクルージョン：これは否定されて今は信奉者はいない。

ミューチャリー・プロテクティッド・オクルージョン：側方運動では臼歯部は離乖するから、臼歯部の難しい咬合面形態にとらわれなくてもよい。

グループファンクションド・オクルージョン：ワイドセントリックやロングセントリックと関連した咬合様式で、咬合規定が曖昧。

最後は、理論に囚われなくて、生体に調和した咬合を考えよう。」

最後は理論に囚われなくて、生体を重要視しようとした保母先生の理論に反論の余地はありませんでした。難解な咬合論も保母先生は抑えるべきポイントを明確にし、そこをマスターすれば咬合論をマスターしたことになることと簡明に教えたのです。開業医の中の学究的な層はこの保母先生のコースに乗ったのでした。早い話がミューチャリー・プロテクティッド・オクルージョンが最良にして最先端であり、他の咬合知見はわき役に押しやられてしまったのです。あとは生体との調和をチェアーサイドでどのように対処するか、の歯科医師の個々人の技術の問題となりました。高価な器具や厳選された材料それに洗練された技術と高度な学識が要求されました。このナソロジー優位傾向は 21 世紀の今もなお続いており、ナソロジーが否定されてもそれに変わる補綴理論を見出すことができません。早い話が、補綴専門医であってもナソロジーの解説はできても、Pankey, Mann, Schuyler (いわゆる PMS_System) の解説ができる人はほとんどいません。包括的に見てみると保母先生の手で東海岸の流派は消されてしまったのです。

6. 追従への反省

反論の余地がないと思われるほどの保母先生の整理ははたしてどうだったのでしょうか。乱暴な整理というよりは、その整理の仕方は誤っていたのではなからうか。Hanau, Gysi までの理論は義歯の理論という断定が間違っているし、フルバランスド・オクルージョンは否定されているというが否定の検証はどこまで進められたのか。McCullum も Granger も最後退位は言っていないし、ナソロジーは全歯列をフルバランスドオクルージョンに持ち込むことを目的にしているのではないと言っている。グループファンクションド・オクルージョンは咬合規定が曖昧というが、厳密を期して破綻したのはナソロジーではなかったか。ナソロジーが否定された後、旧来の伝統的アメリカ補綴学が現代補綴学を牽引しているが、では旧来のアメリカ歯科医学がどのようなものであったかを知る術を日本は持ち合わせていない。Hanau, Gysi の 1920 年代から後の大戦に至るまでの 30 年間どころか大戦以前のアメリカの学術文物が日本にはないからである。戦前の学術図書が皆無の状態の中で、東海岸の理解は困難である。P.E.Dawson が C. Schuyler に謝辞を述べても Schuyler その人が今の日本でははっきりとは分からない。このような状況の中では、Schuyler に師事した桑田先生の立場には苦しいものがあるだろう。この西海岸と東海岸の学術風土の相克は第 3 の立場の相違を桑田先生に負わせることになる。

7. 第 3 の立場の相違

学術風土の相違という立場の違いも、保母先生には有利に働いた。現実には臨床的には実践不可能なナソロジーの技術も、理路整然とした説明の前では現実的な話となった。個々の患者の自由度の大きい Schyler の見解は臨床的というよりは理論好きな日本人には曖昧に受け止められた。桑田先生の『実践 咬合調整テクニック』(2009) は桑田先生が Schuyler と共に臨床をしていた頃の Schuyler の

実践を再現した臨床記録である。臨床画像の背後の意味を解き明かす必要があるために、読み手としては苦渋を強いられるが、Schuyler の思索の片鱗を窺い知ることができる。ワイドセントリックといっても、従来考えてきたような1～2mmの幅ではなく、0.5mm以下のワイドセントリックである。この厳密さに驚くのは一人私だけではないであろう。急斜面を下ってきた車が激突する挿図も複数歯が同調するために挿図から見たほどの衝撃はないが、歯牙を守るためにはソフトランディングに越したことはない。Dawsonを知るためにはSchuylerを知らねばならず、Schuylerを知るためには1930～1940年代を知らねばならないが、その責を東海岸代表の桑田先生に負わせるにはあまりにもこくなことである。なにしろ日本には書籍をはじめ一切の情報が無いからである。

このように、アメリカの西海岸と東海岸の間の相克劇は日本の保母先生と桑田先生のお二人に直接的に影響した。そして全てが桑田先生に不利に働いた。桑田先生が歯科技工士である以上、日本では歯科医師以上の発言はするなと母校の愛歯技工専門学校からもきついお達しがあったと聞く。資格の相違を超えて東京医科歯科大学の石原寿朗先生が桑田先生の講義を所望したときも運悪く諸事情で開催できなかった。そのような状況の中で、桑田先生は日本に帰ってきて桑田カレッジを開設したのである。私の桑田先生への最初のイメージは先にも述べたが、非常に謙虚であり、慎重であり、私よりもはるかにレベルの高い学術を見に付けながら私の歯科医としてのプライドを傷つけることがない配慮には驚いた。桑田先生の性格は長年の時代をくぐってきた状況が作り出したものであったかもしれない。

8. 保母 VS 桑田

このようなことがあった。あれは1980年代初頭のことだったと思う。東京で、保母先生と桑田先生の2大巨頭による講演会があった。それはさながら西海岸と東海岸の激突であり、歯科医師と歯科技工士との激突の体をなした。当時の日本にはアメリカの最新事情はアメリカを体験してきた人からの情報しかないのであるから、大きな会場は超満員であった。保母先生の話は、とにかく、分かりやすいし、面白かった。「見てきたような嘘をつくと思われるでしょうが、嘘ではありません」(爆笑) 一方、桑田先生の方はアメリカで絶賛された実践セラモメタルテクノロジーがある。桑田先生がメタルの上にコンデンスしたセラミック粉末はビーカーの水に漬けても崩れない驚異のデモンストレーションである。スクリーンにコンデンスされる状況が映し出され、はたして水に漬けられた。本当に崩れない！皆が「おお」と声を上げた。アメリカでもこうだったろう。しかし、次の瞬間、セラミックはサラッと水に崩れた。スクリーンからはその瞬間に画像が消えた。数秒にせよ、崩れないこと自体が驚異であったが、いささか拍子抜けの感は否めなかった。引き続き、桑田先生の話は続く。セラミックの表面が滑沢であることは衛生面でも重要なことであった。だから、ナチュラルグレースは必須のものとされてきたが、臨床面ではポテンティックの底面の修正が余儀なくされることが多い。桑田先生はアメリカでの経験から、シリコンラバーによる研磨でも十分許されることを報告した。この言葉は当時の臨床家を安堵させたと思われる。それに対して保母先生は「心強いことをおっしゃって頂く。しかし、ナチュラルグレースに越したことはありません」とやんわりと桑田先生を制した。最後はスクリーンによる講演である。保母先生のスライドのスタートは2面にまたがるシネラマのアメリカの風景である。今では2台のスライド上映によるシネラマ的上映は見慣れたものであるが初めて眼にするシネラマには会場全体がどよめいた。そして、話はまだある。左右のスライドがフェードイン、フェードアウトしてスライドが送られていく。当時としては最新鋭の装置であった。いかにも最新鋭のナソロジカル・インスツルメントを紹介するにふさわしい装置であった。一方、桑田先生の方は一枚一枚が順番に送られていく従来のスライド上映であった。映写法よりも内容が重要であることは承知していても、これには参ったという雰囲気があった。歯科医たちは口を揃えて「良い講演会であった」と言った。

今から思えば、当時のアメリカの実情をお二人がどれだけ知っていたかを考えると、Schuylerと共にアメリカで何年も臨床をしてきた桑田先生と、アメリカには頻りに渡航されていたとはいうものの主軸を日本においていた保母先生とでは二人の間に格段の差があっただろう。この講演会では桑田先生の

口からは P.K.Thomas の臨床例には苦勞したこと、Schuyler のほうが臨床としては優れていたことの報告は無かった。さて、この講演会においてナソロジーよりも PMS のほうが臨床として信頼できるという報告をしていたらどうなっていたであろうか。少しでもその後の日本のナソロジー偏重を軽減させることができたであろうか。いや、P.K.Thomas を信奉していた保母先生の立場を崩し、当時の日本のナソロジー崇拝に水をさすことは桑田先生にとっても日本にとっても良くはなかつただろう。いずれは分かることである。「良い講演会であった」それで良かった。

9. 失われた整理箱

桑田先生は何につけても、一步も二歩も保母先生に席を譲る状況が続いた。今、保母先生は亡く、ナソロジーは否定され、新しい補綴像が模索されている。日本は日本独自の補綴観を持つべきであるが、一方で、これまで追従してきたアメリカ歯学が如何なるものであったかを再度検証しておく必要はある。アメリカは単にナソロジー一色ではなかつた。そのためには、今こそ桑田先生の記憶の限りの実像のアメリカを残しておいて欲しいものだ。私たちが見逃してきた、というか見ることができなかつた別のアメリカがあつたのではないか。

時代は時代が要求するもののみを受け入れる。それはそうなんだが、時代が受け入れるもののみを提供することが時代に沿うことではない。時には時代が受け付けられないものであつても、重要性・必要性ゆえに、敢えて提供することも大事ではなかつたらうか。

今の日本はナソロジーという咬合の整理箱を持っている。ナソロジーは否定されたが修正ナソロジーということであれば、修正知見は慣れ親しんだ整理箱に多少の修正をして収めることはできる。つまり、修正ナソロジー講習会ならば良く分かる講習会となる。しかし、その整理箱には入れ難い知見となると、それは分かりづらいものであり、脳裏に残留しづらい知見となる。つまり、東海岸の伝統的な咬合論はそのままではナソロジーの整理箱には収まらない。“生理学派”の整理箱は失われてしまっている。最初から「生体とは何ぞや」から始め直して新規に整理箱を作らねばならない。そのためにはナソロジー以前のアメリカ補綴学の歴史を知らねばならない。しかし、それは日本には 1950 年以前の文献や情報が皆無なのであるから、不可能な話である。では、アメリカにおいては、ナソロジー否定後において再度歴史の見直しがされたかというところでもないようだ。良くも悪くも、伝統的アメリカ補綴学は粛々と伝統の中にある。当のアメリカは戦前の歴史には一切興味や意義を示さない。それはどうでもよい過去の話なのである。しかし、現在の伝統的アメリカ歯学は戦前そのままの伝統的アメリカ歯学であるかといえばそうではない。これまた、良くも悪くも戦後ナソロジーの影響を大きく受けているため、本来の“生理学派”を知るためには、改めてその根底部分を洗い出さねばなるまい。これは、ひょっとしたらアメリカ自身ではなく、“生理学的”な感覚に鋭い日本の補綴思想がしなくてはならない問題かもしれない。ここに桑田先生が重要な存在意義を持たれることになるのではないか。日本人の感性を持ち、Schuyler と共に臨床をした唯一の人だからである。

10. 桑田先生が見た P.K.Thomas と PMS

先ず、キーポイントはここにある。

『実践 咬合調整テクニック』の中に以下の文章がある。(P37-38)

「 Dr. Peter K. Thomas らのナソロジー学派の仕事においては、クラウン咬合面に慎重に ABC コンタクトを与えることが求められていた。しかし経過観察において困惑したのは B コンタクトが削除調整されているケースが多かつたことで、特に大白歯の非作業側内斜面にある B コンタクトがよく平らに調整されていた。統計をとって見たところ、咬合面をポーセレンで修復した PFM クラウンの場合に、下顎第二大臼歯の頬側咬頭非作業側内斜面と上顎第二大臼歯の舌側咬頭非作業側内斜面にある B コンタクトの削除とチップングが多く見られた。次にチップングが多かつたのは、下顎第二大臼歯舌側咬頭の C コンタクト部であつた。

一方、Dr. Clyde H. Schuylerら生理学派(PMS 学派)の仕事では、FGP テーブルを適合して採得する“ファンクショナルバイト”の不正確さにはいつも困らされていたが、ファンクショナルバイトもプロセスをしっかりと守って採得されれば、それに基づく機能模型が修復物の質と作業効率を高めることもわかってきた。PMS 学派の仕事では、セントリックコンタクトは咬頭の中で上下差のないところとして同一平面上に連ね、エリアオブセントリック (area of centric) を付与するのだが、口腔内での調整が少なく、予後においても咬合接触点が長期に維持され、ポーセレンのチッピングも少なかった。そうしたことから、私の PMS 学派への関心は高まり、Dr. Schuyler からは臨床を通じて意識的に咬合を学ばせてもらっていた。特に、患者の咬合調整のアシスタントを命じられるようになってからは、より咬合への理解が深まっていた。」

“そうしたことから、私の PMS 学派への関心は高まり...” は理屈ではなく、現実を通してナソロジーよりも PMS_System に真を置くようになったいきさつが述べられている。では、何故ナソロジーでは B コンタクトの調整が多かったのであろうか。

私には2つの原因が考えられる。一つは、当時 1960 年代の印象精度を考えると冠不適合があったのではないかと。これはナソロジーだからではなく、PMS にも同様であっただろう。PMS では「支台歯に FGP テーブルを適合して採得する“ファンクショナルバイト”」のおかげで冠過高を事前に避けることができたのではないかと。しかし、問題は単なる冠過高だけの問題ではない。冠過高は冠装着の当日に患者の訴えから削合調整を余儀なくされるが、チッピングは装着後ある程度期間が過ぎてから生じるものである。チッピングが PMS では少なく、P.K.Thomas には B コンタクトまたは C コンタクトに多かったのは何故であろうか。ここに第 2 の原因が考えられる。PMS には無く、P.K.Thomas にはあったものは顎位の強制的最後退位設定と1歯対1歯咬合である。患者も Dr の真摯な説明で頭では納得し、さしあたっては冠過高さえ調整してもらえば我慢できても、身体のほうで自然を求めて、咬みたい場所で咬もうとして期間が過ぎると過度接触部位にチッピングを生じる。

桑田先生の体験は重要なことを含んでいる。

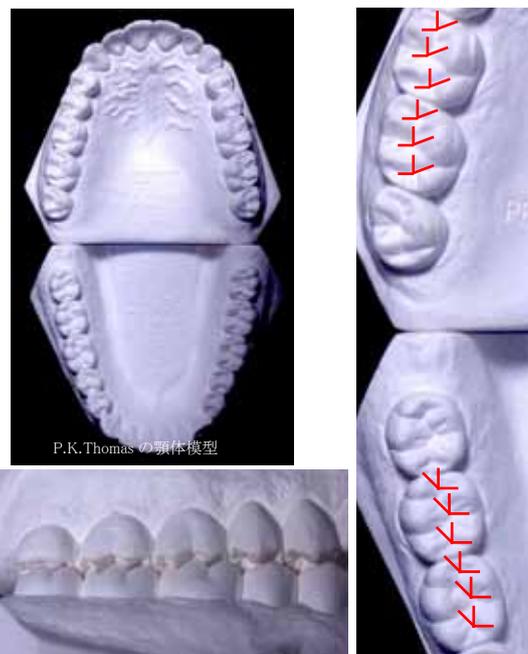
「PMS 学派の仕事では、セントリックコンタクトは咬頭の中で上下差のないところとして同一平面上に連ね、エリアオブセントリック (area of centric) を付与するのだが、口腔内での調整が少なく、予後においても咬合接触点が長期に維持され、ポーセレンのチッピングも少なかった。」

生体が拒否することを生体に押し付けてはいけない。チッピングは生体による修復行為である。チッピングから学ぶことは多い。チッピングが少ないということは、生体の許容を得ているということになる。

このように、現実には桑田先生が長年の中から得てきた体験を、どうして、日本においては生かせられないのか。どうして桑田先生の声が届かないのか。どうして Schuyler を検証しようとししないのか。

11. 日本の補綴観

日本には古来、自然を尊ぶ風土がある。あれほどナソロジーが吹き荒れても、「理論は理論、生体の現実はまだ別」という判断があったのではないかと。費用が出せるからといって、シンプルブリッジを

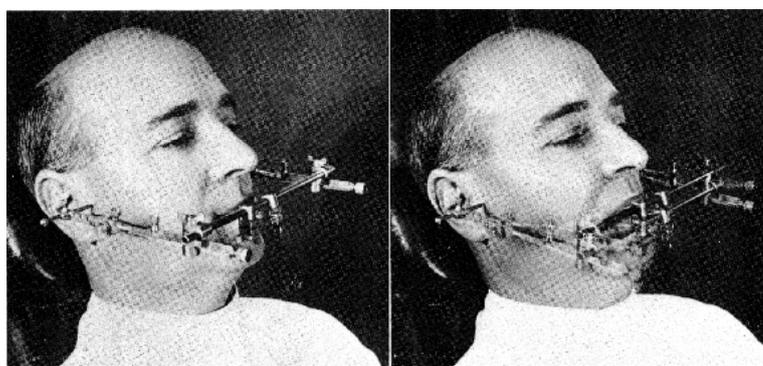


P.K.Thomas の咬合様式

ABC 点の内、B コンタクトにチッピングが生じるのは、3 点の内 B 点が一番強い力を受け、かつ自由本来の前方位からの咬合位・滑走経路上にあるため。第 2 大臼歯の C 点のチッピングは自由本来の前方位咬合位・前方運動のときの咬合による。

ナソロジーに基づいてフルブリッジにした人はほとんどいなかったのではないかと。私にもフルブリッジの経験は2,3ある。しかし、それはナソロジーを持ち込むためにフルブリッジにしたのではなく、症例そのものがフルブリッジにならざるを得ない症例であった。そのときに先ず問題となるのが顎位の設定である。従来の患者の顎位を Tek で順次置き換えてフル Tek に持ち込み、従来の顎位を再現するという方法が考えられる。理屈はそうなのだが、途中で根管治療があったり、Tek の破損があったり、Tek 製作途上で気がつかぬ微妙な顎位に変化を与えたり、Tek 自体が摩滅しているかも知れぬ等、新補綴物製作までに数ヶ月を要することを考えれば、従来の顎位の精密な継承は実際は不可能かもしれない。次には Tek で様子を見て顎位に問題なしというところで顎位の設定をする“Tek による顎位設定”がある。問題は Tek にせよ、どのようにして顎位を設定するかがでてくる。このときに、1850 年の Buckingham の言葉「患者は時として自然のように咬んでくれない。そこで術者は親指を頤に押し当てて後方へ誘導してやらねばならない。」が思い起こされる。170 年も昔の話である。見た目は似ていても、P.K.Thomas の強制的誘導ではない。

ほとんど知られていないことであるが、ナソロジーの始祖 McCollum の顎位設定法は Stuart や Thomas とは異なり、最後退位ではなく、“drop open”させて BT を採得して顎位並びに Hinge Axis を求めている。少し横道に入るが、そもそも、McCollum には“最後退位”という概念そのものがない。



McCollum の Hinge Axis の求め方

McCollum は最後退位を取らせていない。

左：下顎クラッチにフェースボーを装着

右：“drop open”させて、ピンの先が動かない位置を探る。(本図は2重露出)人為的に後方位で開閉口させていないことに注意 (永田)

創始者 McCollum が提唱したナソロジーと戦後の Stuart や P.K.Thomas が主導したナソロジーとは根底が異なるのである。

これには、東京医科歯科大学の藍稔先生が「真実を求めて とくに咬頭嵌合位に関して」(補綴誌,10(3)P193, 2019.)の中でこの問題を取り上げている。「McCollum は蝶番運動のさせ方として“drop open”させている。」「下顎頭を後上方や前上方へ誘導するなどという言葉はどこにも見当たらない」「下顎頭は最後位ではなくわれわれが言う顎頭安定位付近にあることになる」「McCollum の論文が出て何十年も経っているのに dropping open が問題にされなかったのは不可解である」「“ナソロジー”は当初の McCollum の考えとは違ったものになったということになる」

習慣位とも筋肉位とも種々な名称が飛び交うが、結局は患者の感覚になじんだ顎位で行くしかない。そして、これがまた問題なのであるが、患者が良しとした顎位が本当に正しいのかはまた別である。総義歯のときに体験することであるが、GoA まで使用して万全を期した顎位が本義歯装着で全然異なることがある。技術の未熟が考えられるが、生体とはそのようなものであると捕らえるのも、また技術の一部分である。絶対的技術でもって1回でもって達成できることが最も理想的なことであるという考え方も一つの技術観であるが、そこには医療者のパターンリズムが生じやすい。現実には試行錯誤法しかないが、最後は長年の経験が物を言うということになるだろうか。

このような東洋的な曖昧な学術姿勢は恐らく西洋にあっては認められないことであろう。西洋から見れば、試行錯誤法は“法”が付いた名称ではあるが、実態は“失敗の連続法”であり、“法”でもなんでもないということになる。しかし、試行錯誤法には“やり直し修正する”行為が前提としてある。“一発成功”は聞こえは良いが、そこには術者主導の世界が垣間見える。考えてもみよう。日本は“木彫義歯の文化”の国である。そこには咬合器も無い世界だ。製作された義歯が口腔内に装着されたとき、最初は全然合わない。それから、試行錯誤的に合わせて行くのである。西洋においては不適

合は失敗であり、失敗は一つの最後であるが、日本では不適合はスタートなのである。この文化の差は生体理解において重要と思うが如何であろうか。

12. PMS と日本文化の近似性

PMS について、再び桑田先生の『実践 咬合調整テクニック』から引用しよう。「口腔内での調整が少なく、予後においても咬合接触点が長期に維持され、ポーセレンのチッピングも少なかった。」

日本の試行錯誤法に PMS の技法を取り込めばどうなるであろうか。PMS は日本文化に取り込みやすい技法観がある。ワイドセントリックやロングセントリックは試行錯誤法をできるだけ短縮させる方法と言えなくも無い。はたして、Schuyler はどのような考え方でもって臨床に望んだのだろうか。

ここまでの文章も、私が Schuyler を熟知していたから書いたのではない。私は Schuyler について何も知らない。ただ Schuyler は並外れた臨床の観察眼を有した歯科医であることに注目はしていた。パーシャルで 1930 年代はクラスプと鈎歯との関係で“rigid か flexible か”について長年の論争があった。そこで、Schuyler は粘膜負担を踏まえた rigid support を表明する。また、平衡側の早期接触についての有害性を指摘して今日の咬合学の端緒を開いた。どのような咬合を与えたらよいのかについてグループファンクションを提唱したのも Schuyler である。1930 年代のデンタルラボのレベル向上を訴えたのも Schuyler であった。一体、Schuyler とはどのような人物なのであろうか。アメリカの東海岸の生理学派の中でどのような位置を占めた人だったのであろうか。Schuyler 亡き後、その人の全貌を知る人はいなくなってしまう。Schuyler の同僚よりも Schuyler をよく知る人は桑田先生であろう。なにしろ、共に臨床をしてこられ、悩みも喜びも共にされたのであるから。最後退位ではない意味での“中心位”の設定法などは Schuyler は最後まで悩んでいたのではないか。グループファンクションの創唱者ではあるが、理論はひとたび通説化すると創唱者から離れて一人歩きを始める。グループファンクションといっても種々なグループファンクションがある。後半の Schuyler はどのように考えていたのだろうか。紋切り型に定型化したグループファンクションではなく、個々に異なる歯列や各歯の健康状態など変幻する症例の中で、Schuyler はどのように対応したのか。

松尾芭蕉の言葉

故人の跡を求めず。故人の目指したところを目指せ。

Schuyler の目指したところは何であったのであろうか。我々は、ナソロジーの次に何に追従すればよいのかを探すのではなく、Schuyler の目指したところを目指したいと思う。それにしても、我々はあまりにも Schuyler を知らない。桑田先生には Schuyler の伝道者として、また、日本の補綴観の提唱者として一里塚を築いて欲しい。私には PMS がナソロジーよりもずっと日本文化に馴染みやすいものだという気がしてならない。

そのためにも、桑田先生の健康を願わずにはいられない。先生、後を行く人のためにもどうかお体を大事にしてください。

永田和弘 令和 1. 5. 2 ~ 6.

追記

思い返せば、受講した桑田シニアコースでは桑田先生からは聞き知らぬアメリカの歯科医師や歯科技工士の方々の名前がたくさん出てきた。日本では傑出した人名は残るが、そうでなければ歴史のそこに埋もれてしまう人々である。しかし、歴史は傑出した人物によってのみ形成されるのではない。むしろ、歴史は時代が過ぎれば失われてしまう人々によって形成されてきた。名も知らぬ人の言動こそが良くその時代を物語ることがある。1978 年のシニアコースの受講メモを見てみた。

メモから人名を列挙したい。(聞き取り間違いがあるかもしれない)

Glickman、Goldman : Perio の重要性を説き、ポーセレンの為害作用を説く。

ワインシュタイン、マーバー : 審美性のみのポーセレンは歯周組織を侵し否定された。

D. ピエトロ : Ney 社で共に働く。

シグモント・キャッツ : ロックモデルの開発。

Peter A. Neff, Nelva M. Bonucei, Georgetown Univ. school, 意思ある所に道あり。

セラモメタルテクノロジーのあとがきには次の方々の名前が見える。

C. H. Schuyler : 1964

S. Katz : 1963

S.wagman : 1963

R. S. Stein : 1966

P. E. Dawson、P. K. Thomas

Schuyler C.H. の論文

- 1) CLYDE,H.SCHUYLER;; THE PARTIAL DENTURE AS RELATED TO FULL DENTURE CONSTRUCTION., J.A.D.A.VOL15.P1710-P1717,1928., 1928/160.
- 2) Schuyler, C. H.; Parcial Denture Design, Giving Thought to the Maintenance of Balanced Occlusal Relations., D.Cosmos, 72, 272-274, 1930. , 1930.
- 3) SCHUYLER C.H.; INTRA-ORAL METHOD OF ESTABLISHING MAXILLOMANDIBULAR RELATION, JADA 19:1012-1021, 1932.
- 4) SCHUYLER,C.H.; STRESS DISTRIBUTION AS THE PRIME REQUISITE TO THE SUCCESS OF A PATIAL DENTURE., J.A.D.A.,20:2148-2154,1933, 1933.
- 5) SCHUYLER CLYDE H.; FUNDAMENTAL PRINCIPLES IN THE CORRECTION OF OCCLLUSAL DISHARMONY,NATURAL AND ARTIFICIAL, JADA 22,1193-1202, 1935., 1935.
- 6) Schuyler, C.H.; Relation of the Dentist to the Commercial Dental Laboratory., J.A.D.A., 23:2355-2362, 1936. , 1936.
- 7) SCHUYLER CLYDE H.; PROBLEMS ASSOCIATED WITH OPENING THE BITE WHICH WOULD CONTRAINDICATE IT AS A COMMON PROCEDURE, JADA,26:734-740, 1939.
- 8) SCHUYLER C.; CORRECTION OF OCCLUSAL DISHARMONY OF THE NATURAL DENTITION, NEW YORK STATE DENT. JOUR. 13:445-462 1947, 1947.
- 9) Schuyler CH; Factors of occlusion applicable to restorative dentistry., J Prosthet Dent, 3 : 772-782, 1953. , 1953.
- 10) Schuyler CH; Considerations of occlusion in fixed partial dentures., Dent Clin North Am, Mar, 175-185, 1959. , 1959.
- 11) Schuyler CH; An evaluation of incisal guidance and its influence in restorative dentistry. , J Prosthet Dent, 9 : 374 -378, 1959. , 1959.
- 12) Schuyler,C.H.; Factors Contributing to Traumatic Occlusion,, J.Pros.Dent., 11:708, 1961. , 1961.
- 13) Schuyler CH; Discussion of three articles on the subject of occlusal rehabilitation., J Prosthet Dent, 13 : 719-723, 1963. , 1963.
- 14) Schuyler C.H.; The function and importance of incisal guidance in oral rehabilitation. , J Prosthet Dent, 13 : 1011-1029, 1963. , 1963.
- 15) PANKEY,L.D.,MANN,A.W., AND SCHUYLER,C.H.; THE TEACHING FOR THE P-M-S PHILOSOPHY OF OCCLUSAL REHABILITATION SEMINAR, , 1964.
- 16) SCHUYLER,CLIDE H.; FREEDOM IN CENTRIC, DENT.CLINICS OF NORTH AMER. 13:681-686, 1969.